会長の時間　　●冨田会長

ロータリー平和フェローについて

先々週に引き続いて平和と紛争予防・紛争解決月間に関して述べたいと思います。

ロータリーには「ロータリー平和フェローシップ」と称する奨学金があります。ロータリー財団は、平和構築と開発の担い手となる人材育成の為に活動経験等を考慮して毎年世界で 130 人を選び、奨学金を授与します。この奨学金を授与された学生をロータリー平和フェローと呼びます。

平和フェローは、世界の８つの大学にある７つの平和センターで学ぶこととなりますが、日本では、国際基督教大学（ICU）に設置され、平和と開発に関する修士号取得プログラムが提供されています。

これまでに世界で 1,700 人以上の平和フェローがロータリー平和センターを卒業して、140 ヶ国以上で、政府、NGO、教育、研究機関の他、国連等の国際機関で活躍しています。

ICU の平和センターでは、紛争や開発に関する問題解決スキルの養成と、国際平和の実現、及び国際協力の発展に向けた積極的な取り組みを支援しています。２年間の修士課程プログラムの中で、広島研修が実施されていますが、日本のロータリー会員一人当たり 15 円、合計 130 万円がこのプログラムに充てられています。

さて、平和と対極の戦争論といえば、中国春秋時代の「孫子」とプロイセンのクラウゼヴィッツの「戦争論」が代表格ですが、この２冊はまるで性格を異にします。

所謂、勝利の為の戦法を説いたクラウゼヴィッツに比べ、直接的戦闘より、策略・謀略を用いた間接的戦略を重視する孫子は意外にも英米で支持されました。

孫子の「百戦百勝は善の善なるものに非ず。戦わずして人の兵を屈するのは善の善なるものなり」、「彼を知り己を知れば百戦して殆うからず」、「善く攻むる者には、敵、其の守る所を知らず。善く守る者は、敵、其の攻むる所を知らず」という言葉は余りにも有名です。

孫子は戦争よりも国家維持が重要と考え、また、戦争が勃発したとしても素早く結着することが重要で、費用対効果も考えていたとされています。また、目先の戦闘に勝利するより国家と戦争の関係から何よりも平和を説いていたので、戦争論と称されながら、実質は平和論でもあり、2,500 年を経過した今日まで普遍的価値があるように思います。

そして、この平和への思いは、現在のウクライナ侵攻やイスラエル・ハマス戦争に於いてもしかりで、ロータリー平和フェローの使命と同じく早期に解決できることを願うばかりです。